
目覚めの時

かずは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田覚めの時

【著者名】

かずは

【あらすじ】

ある日オレは不思議な夢を見た。その後学校へ行くと夢にてきた少年がいた……

第1話（前書き）

はじめまして。かずはです。
駄文ですが……ずっと前から書きたいって思つてた話です。
評価・感想よろしくお願ひします。

第1話

「 やつと見つけました……私のことが分かりますか……？今から迎えに参ります。それまで待っていてください 」

不思議な夢だつた。一人のオレと同世代ぐらいの少年がオレに話しかけて来たのだ。

「俊也！急ぎなさい！」

下から母さんの声が聞こえた。オレは眠たい目をこすつて返事をした。

オレは神風俊也。高校2年。サッカー部で次期キャプテンの予定。ただひとつ問題なのは腕に刻まれたこの謎の銀色の印。よくわからぬけれど、生れつきあるらしい。でも先生には入れ墨だと思われていていつも白い目で見られる。これにはもう慣れたけど、でもうんざりする。

今日は春休みが明けて最初の登校日。夢のことは今は忘れて急いで支度を済ませて階段を下りる。

「行つてきます！」

玄関の扉を乱暴に閉めて、オレは公園の前に向かった。

そこには、渡部香奈がいた。香奈はオレの自慢のかわいい彼女だ。

「神風君、おはよっ。」

「おはよ。待つた？」

香奈は校内一人気の女子。その彼女に思い切つて告白したのはつい最近のことだ。だからオレも香奈もお互い恥ずかしくてまだ苗字で呼び合つてる。いい加減ちゃんと名前で呼びたいんだけど。

「つうん。あたしも今来たところだから。」

「そつか。」それからオレと香奈は学校へ歩き出した。

「あのね、神風君。あたしね、今日変な夢見たの。」
いつものたわいのない会話。

「オレも。なんか知らない人に話し掛けられる夢でさ。あつちはオレのこと知ってるみたいなんだけだな。」

「そりなんだ……あたしは階段から転んで落ちる夢。」

「へえ……まあ渡部はかなりおっちょこちょいだからな。ホントに階段から落ちんなよ。」

「大丈夫よ。あたしだってそこまでドジじゃないもん。……きやつ……！」

香奈は石につまづいて転びそうになつた。オレが香奈を受け止めて転ばなかつたのだが。

「だつ大丈夫か？やつぱり渡部はドジだな。」

「「めん……」

「そりいえばさ今日新しいクラスの発表だよな。」
オレは無理矢理話題を変えた。多分話が続かなくなつてしまつと思つたから。

「うん……また一緒にいいなあ。」

「ああ。きっと大丈夫だつて。

んじや、ちょっと急いで行つてみない？」

「うん……心配だなあ……」

オレと香奈は話しているうちに学校に着いていたので、とりあえず急いで昇降口へと向かつた。

注意深くクラスが書いてある表を見る。すると……同じクラスだつた。

「渡部、良かつた。同じクラスだな。」

「うん！神風君と一緒に良かつたあ。」

ホームルーム開始5分前を知らせるチャイムが校舎内に鳴り響く。
オレと香奈は急いで教室へと向かつた。

本邦のやしゃを観むるに云ひては、このも頗るわざなり。

第2話（前書き）

久々の投稿ですね。
評価、感想をよろしくお願いします。
まだ一つもないのに非常に寂しいです

o
r
z

第2話

オレと加奈が教室に入った瞬間、ありえないことが起じた。それまで普通だった生徒みんながまるでテレビの一時停止ボタンを押したかのように動かなくなってしまったのだ。もちろん、加奈も例外ではない。

「どういふ事だよ……」

一人呟いたところで誰の返事もないだろう。

しかし、違つた。

「すみません。僕が止めたのです。」

後ろから声がしたのだ。

「あなたは……」

振り向くとそこに立っていたのは今朝の夢にでてきたあの少年だった。

夢にでてきた時はぼんやりとして分かりずらかつたが今日の前にいる彼は間違いなくそれだつた。どこにでもいそうな服を着てはいるが、何となく近寄りがたい雰囲気を出している。

「……神風俊也さんですよね？」

「そうだけど……」

「そうですか……やつと見つけた！私のことはわかりませんよね……」

彼は悲しそうに言った。

「すみません。」

「いいんです。しょうがない事なんですから……俊也君、あなたはその腕の印の意味を知っていますか？」

何故彼はこの事を知っているのだろう？

「知らないんですけど……アザかなんかじやないんですか？」

「いいえ。違います。その印は君の封印の印なのです。」

「封印？」

すると彼は悲しそうに語り始めた。

「それは今から……この世界では15年、私達の住む世界では3ヶ月前のことでした。ある一頭の竜が封印されたのです。不運な事故でした。その竜は別の種族に身体を変えられて、別世界に飛ばされました。」

オレは次に彼が言った事がとても信じられなかつた。

「……その封印された竜があなたなのです。」

「……えつ？」

「ゆつくり話したいのですが……時間が無いのです。強引ですが……封印を解かせていただきます。」

「えつ？！ええええええええええええええええええ！」？

『我、竜神に仕えし者、ラクス。我的名にかけて今封印を解こう。ギルド・フレイム』

彼がその言葉を言い終えたあと、オレはいつのまにか屋上にいて、腕の印は輝き、眩しさに思わず目を開じてしまった。次に目を開けた時には目の前には深い緑色の鱗に被われた竜が立っていた。

竜は、静かに言った。

「『』自分のお姿を『』覧になつて下さい。」

気がつくと目の前には大きな鏡があった。

それを覗くと、そこには銀色の竜が映っていた。その姿を見た瞬間オレの頭は金づちで叩かれたように激しく痛んだ。

苦痛の中ではあつたが何か温かいものが自分の身体に入つて来るのが分かった。

何故だかは分からぬが懐かしい感じがして。不思議と痛さが和らいでいた。

そしてオレは神風俊也ではなくつた。いや、正しくは元に戻ることが出来た。竜族の長、ギルド・フレイムに。

「ラクス、」苦労だつた。ありがとう。」

「それでは……思い出されたのですねー、ギルド様！」

「ああ。私はもう大丈夫だ。徐々に魔力も戻りつつある。まずは戻らなくてはな。私もこっちに随分長居をしてしまつたからな。」

私は戻りつつある魔力を使ってここ人間界から自分の痕跡を消し、ラクスに言った。

「しかし、ラクス、まずはあなたの治癒が先だ。ここに来るのは大変だつたろう。帰りは私と共に行こう。そなた、大分無理をしているな？身体が傷だらけだ。魔法で隠しても私には分かる。」

「ギルド様……」

そういうと気が楽になつたのかラクスの魔法は解けて、ラクスはその場に倒れた。

「全く。ここまで無理をしてまで私を探しに来るとは……時間がないというのは自分の体力の限界だつたのか。そなた、私がいなければ死んでいたぞ？」

そういうながら私はラクスの身体に治癒の魔法をかけた。

「そなたには休養が必要だ。今夜一晩、ゆっくり休みなさい。」

「ありがとうございます……」すぐにラクスは眠りに落ちていった。ラクスを背に乗せ、私はゆっくりと屋上から飛び立つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0793c/>

目覚めの時

2010年10月10日03時13分発行